

高木日向子／咲くやこの花インタビューvol.27

高木日向子(たかぎ・ひなこ)【令和2年度 音楽部門[作曲]】



現代音楽——。この一見アカデミックで専門性の高そうな字面から、「聴く人を選ぶのでは？」といふか
しがる人も少なくないはず。そんな現代音楽の知られざる魅力を「げんだいおんがく」ぐらいの気軽さで紹
介する、作曲家の高木日向子さん。作曲や演奏会の傍らワークショップを行い、時に既存の音階をも取っ
払い「分からなさも含めて楽しんで」と大胆に声掛け。朗らかな笑みに背中を押され、ここでは誰もが作曲
家、音楽家気分を味わえそうです。そんな高木さんですが、じつは大学院修了後は長らく迷いの中にあっ
たと告白します。自らを「作曲家」と名乗るに至るまで、どんな思いで過ごし、どう壁を乗り越えて来たの
か。当時の思いを語ってくれました。

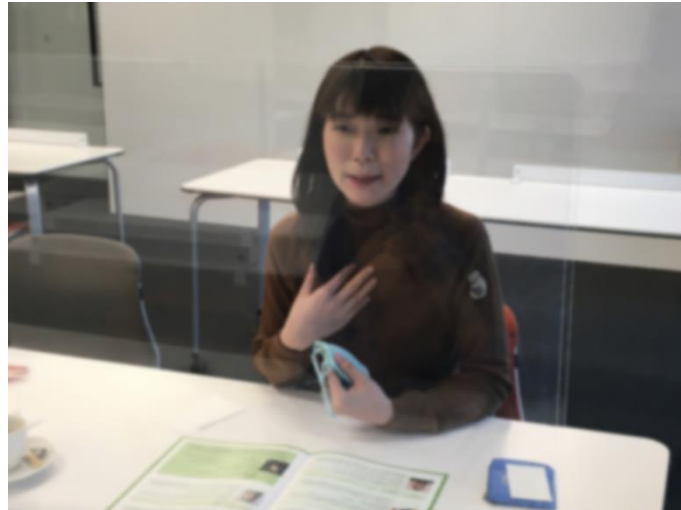
◎取材・文・撮影：石橋法子

「最後は『好きなことをしよう』と挑んだコンクールで初めて本選を通過した」

「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。2月の贈呈式には美術、音楽、演劇・舞踊、大衆芸能、文芸
その他と5分野の受賞者が一堂に会しました。

色々な方がいらして、楽屋でも皆さんと楽しくお話できました。贈呈式では司会者の方がうまくリードしてく
ださり、リラックスしてお話できたのですが、でもやっぱりいつもとは違うテンションになっていたのかなと。
家に帰ってから、どっと疲れが出たので(笑)。受賞の知らせには驚きました。じつは平成29年度に同じ

音楽部門を受賞されたパイプオルガンの富田（一樹）君とはご縁があり、大学院修了の演奏会の時に指揮をしてもらった仲間なんです。富田君は大学を首席で卒業されて、オルガンだけでなく作曲や指揮もされていて、当時から光輝いていました。まさか同じ賞を頂けるとは、その時は思ってもいませんでした。



受賞は励みになるものですか？

そうですね。嬉しいけどあまり気負わずにやっていきたいなと思っています。初めての受賞は2017年の日本音楽コンクール（作曲部門第3位）でした。コンクールはそれまでにもたくさん受けていて、本当に全部ダメという状況だったんです。日本音楽コンクールもじつは2016年を最後に応募するのはやめようと思っていました。

その2016年の挑戦で、初めて1次を通過されて。

あれって1次を通過して、2次がダメだったとか、全部結果が新聞に載るんですよ。それで「まだ頑張っているんだね。応援しているよ」と連絡くれた方がいて。案外気にかけて、見てくれている人っているんだなと思って、来年あと1回だけ応募してみようと決めて。でも多分落ちるから、どうせ出すなら「本当に自分の好きなことやろう」と受けた2017年の日本音楽コンクールで初めて本選まで行けたんです。その時に、コンクールというのはあまり気負わずに、自分のやりたいことを大事にして受けるのが一番大事なんだなと思いました。良い結果もあれば悪い結果もある。でも結果がどうであれ、「自分の好きなことをした」と思えたら一応の満足感はある。そのことにやっと気付けた。それ以降、結果はお尻にくっついてくるものという意識でいます。

当時、2016年を最後にと決めた理由は？

それは今は間違っていたと思うんですけど。以前は、受賞歴がないと作曲家として名乗れないと思っていました。作曲家というのは資格とかじゃないので、自分で「作曲家です」と言った時点でなれるんだと思うんです。でも自信をまったく持てなくて。だから音楽大学と大学院で作曲を学んでいました、とまでしか言えなかった。みんなが「ヴァイオリニスト」とか書いた名刺を持っているのに、私は全然そんなものを作る自信もなかった。そこを何か賞を受けることで、自信にしようと思っていた節があつて。でも全然ダメで……。別に賞の獲得とかはどちらでもいいから、とにかく自分は作曲家だという自信を持って、そこから音楽を作っていけば良かったのに。

大学院を修了されたのが 2013 年。そこから 3、4 年間の出来事ですね。

大学院を修了したのが 24 歳かな。学生が終わってそこから「自分は作曲家だ」という自信を得るために、本当に色々なコンクールに楽譜を出していました。でもやっぱりコンクールというのを意識しすぎて全然うまくいかなかった。4 年ぐらいコツコツと応募しては落ち、応募しては落ちを繰り返して。本当はそこでだいたいの人が諦めちゃうのかもしれないんですけど、私はわりと負けず嫌いで、諦めが悪い性質なので（笑）。やっぱり優秀な先輩後輩が多いなかで「私は何もできていない」という気持ちが結構強かった。だから頑張れたのかなと思っています。

そもそも音楽との出会いはピアノから？

小学校 1 年生ぐらいからヤマハ音楽教室でピアノを習っていました。わりと本格的に頑張るコースの中の落ちこぼれ、という感じ。もともと幼稚園の時にピアノのグループレッスンみたいなものがあつて。そこでわりと母が厳しく宿題を見てくれていたお陰で本格的なコースにも入れたし、多分そこで私もピアノが好きになって「これが得意だ」という自負もあったのだと思います。



ヤマハ音楽教室では作曲も学ばれていたとか。

それまでにも作曲っぽいことは何回かしていました。ヤマハに入ると JOC(ジュニアオリジナルコンサート) といって、生徒が自ら作曲して演奏する教室内の作曲コンクールみたいなものがあるんです。成績は良くなかったんですが、自分で曲を作ることは楽しかった。中学生の頃は、通っていた中学校が特殊で、クラスごとに「学級歌」を作る習わしがあったんです。それを毎年文化祭の合唱コンクールで発表する。私はピアノを習っていて音楽の素養もあるからと、作る係になりました。40 人ぐらいのクラスメイトに自分の曲を演奏して歌ってもらえるので、すごい機会なんですよ。多分その時の感動も作曲を勉強しようと思ったバックグラウンドとしてあったと思います。

高校は、兵庫県立西宮高等学校音楽学科ピアノ専攻に進学されます。

高校ではピアノしか見えていなかったのですが、高校3年生で進路を考えたときに、そういった中学時代の思い出や、ちゃんと作曲をしたいという自分の思いに気付いて、その年の夏に作曲学科へと進路変更しました。「作曲学科に行きたいです」と急に相談したので、先生もびっくりされていて。こないだまで「どこの大学のピアノ科を受けようか」と準備して話していたので(笑)。たまたま相談した先生のご自宅の数軒隣に大阪音楽大学の先生が住んでらして、それが6年間、作曲の指導を受けることになる久保洋子先生なんです。結構行き当たりばったりなようできて出会いにも恵まれて、ちゃんと道が出来ていたなと思います。

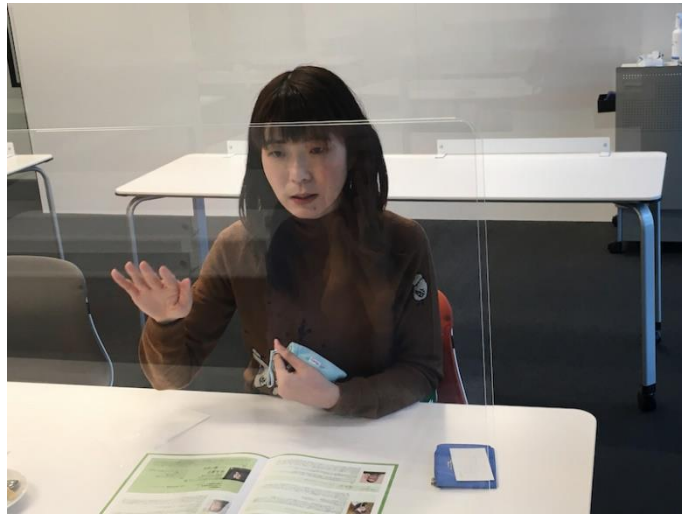
「音楽の楽しみ方の一つじゃない。皆さんの中の新しい“芸術の扉”を開けたい」

高校卒業後は、晴れて大阪音楽大学作曲学科作曲専攻に入学されます。その後、同大学院作曲研究室でも学ばれました。印象的な授業などありましたか。

そもそも高校では作曲学科を受験できるまでの勉強をやったことがなかったので、そこは一からの勉強でした。でも楽しかったですね。やっぱり後から気付くんですけど、ずっと勉強したいと思っていたことだったので。現代音楽をちゃんと聴いたのも大学へ入った頃からです。現代音楽は私たちがよく耳にする 19 世紀などのクラシック音楽よりも、(音楽を構成する 3 要素の)和声、メロディ、リズムなどがはっきりしない。すごく抽象的に聴こえる音楽なんです。

そういう定義なのですか？

「今までにないものを作ろう」「既存のものを壊していこう」という流れの中に出てきたものなので定義ではなく、色んなスタイルのものがあって一概には言えないんですけど。基本的には和声は一般的なクラシック音楽よりははっきりしていなくて、メロディもあまり聞きとれないことが多く、リズムもそこまではっきりしていない。だから一見「訳が分からない」とってしまう音楽が多いんです。



なるほど。

当時はまだ何も知らなかったなので、感想を聞かれても「ちょっとよく分かりませんでした」というぐらいしか言えなかった。でもその訳の分からなさを分かりたい、これを勉強して分かりたいという気持ちがすごくあったなと思います。

大学で理解への糸口を見つけられて？

やっぱり楽譜をちゃんと分析するとよく考えられている。理論的に説明できるようになっていて、本当に美しい。それは音だけでは分からなくて、学んでいくことで「やっぱり作曲家の人って、こんなに深く考えてやっているのか」とだんだん分かってくるものでした。

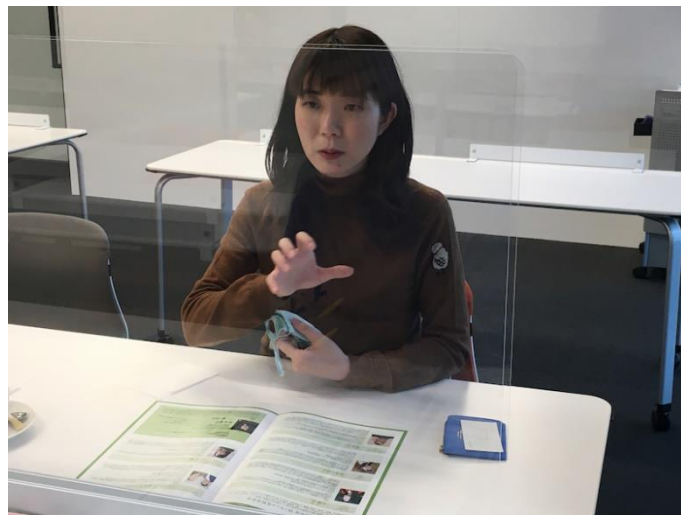
例えばこの音の組み合わせは、こういう感情を引き出すとか、万人が美しいと思うような法則などがあるのでしょうか。

感情というよりは……何でしょうね。何だろう。例えば「ドレミファソラシド」という既存の音階があるなかで、それを崩してオクターブ内にある 12 個の音を均等に使うように自分で音列を決めて、その音列をもとに曲を作っていく「十二音技法」というのがあるんですけど。それって無機質な音楽になりそうに思うじゃないですか。でも多分そのシステムを使って感情に訴えかけられる音楽を作っているんだろうなと思って楽譜を分析すると、一見訳の分からない、もしかしたら適当に決めてるんじゃないかと思うようなものも、じつはしっかりと理論的に決められている。しかも音楽性もしっかりある！と気付けた時があって。その過程がすごく面白かった。

どこか謎解きを楽しむようなエピソードですね。高木さんは作曲の傍ら、そうした「現代音楽を聴く楽しみ」を伝える活動にも積極的です。そこではどんなお話を？

こういう難しいことは、考えなくていいんです(笑)。例えば、今まで聴いたことのないものを聴くとか、この楽器でこんな音が鳴るんだとか、知らないことを知るのも一つの楽しみでしょうし。また、いま生きている作曲家がどんな考えで曲を作っているのか、曲の背景を文章で説明したり、可能ならばその場に出向いて説明したり。それは音の並びがどうかではなく、例えばそこには時代を反映したテーマがあつてとか。そういう作曲家の思いや考えを知ったうえで曲を聴くというのも、楽しいことではないかなと思っています。あとは演奏者としっかりコミュニケーションを取りながら、音楽を作ってみる。

実際に参加者が曲作りを体験することも。



それこそ現代音楽ならではの、いま生きている作曲家にしかできないことだと思います。クラシック音楽だとどうしても、亡くなった作曲家の曲を演奏者がなんとか解釈して音楽で共有する形になる。でも現代音楽ではいま生きている作曲者と演奏者、聴衆の方が一体となって音楽を作っていける。その場の空気感も含めて、ちゃんと作品として仕上げていく。その過程がすごく楽しい。皆さんの中にある新しい“芸術の扉”みたいなものを開けていけたらいいな、という思いでやっています。

新しい感覚、感性との出会いはワクワクしそうです。

音楽の楽しみ方ってこういう方向からもあるんだ、という感じでしょうか。私の印象として、音楽を聴くのが好きという人はたくさんいる。でもショパンとか名曲に偏りがちで、そういう人ほど「現代音楽はちょっとね」と仰る方が多くて。だけど1回新しい発見もして欲しい。いま生きている作曲家の生の声を聞きながら、演奏者がいて、聴衆者がいて。この3つのコミュニケーションをしっかりと体験できるのは、現代音楽しかないと思うので。

おすすめの現代音楽はありますか？

と言いつつ……、もう亡くなった方なんですけど(笑)。私が一番好きなのはオリヴィエ・メシアン、フランスの作曲家です。曲の響きが圧倒的に美しい。あまりにも好きすぎて生演奏でしか聴かないようにしているぐらい。聴いたら頭の中にぐるぐる回っちゃうぐらい大好きな作曲家です。日本の方だと武満徹さんとかが好きですね。でもあまり好き嫌いは考えずに音楽は聴こうかなと思っていて。作曲科の学生が作る曲も大御所の曲も、やっぱり初めての演奏に立ち会うのはすごく素敵なことだと思うので。まずは聴いてみる、そこから好き、ここは好みじゃなかったと思えるのも含めて、楽しんで欲しいなと思います。

「楽譜やルールも自分たちで作ってOK！ 現代音楽って何でもありなんです(笑)」

作曲のお仕事でいうと、先日は尺八とリコーダーのために新曲を書かれたとか。



世界中でコンサートを開催されている尺八奏者の田嶋直士さんとリコーダー奏者の鈴木俊哉さんが、阿倍野区民センター小ホールで開いた『尺八とリコーダーのためのコンサート』のために新作を書かせて頂きました。尺八とリコーダーは、縦笛で息を吹き込んで吹くという発声原理は同じでも、歴史的にはまったく違うバックグラウンドによって作られた楽器なので、音色も似ているようで微妙に違う。リコーダーは運動性があり、わりと動きの速いものにも対応できる。尺八は前面に4つ、背面に1つの穴しかなく、音程の差も口や手孔を細かく操作されるので、一般的にはあまり運動性は利かない。その分、ロングトーンなどの長い音を吹くとすごく美しい。そんな2つの楽器の特徴を組み合わせ曲を作るのは楽しかった。それ

ぞれの特徴がしっかり生かされたというか、音が合わさることによって生まれる音色を大事にしながら書きました。

来る3月21日には大阪市中央公会堂の特別室で、高木さんもご出演されるライブ配信による演奏会『リベラルアーツへの挑戦 vol.5「空間への捧げもの」和と洋の折衷 空間と音楽』が開催されます。

建築の写真を撮られる写真家の大竹央祐さん、カーテンの布を専門に扱って空間を彩られるインスタレーションの永吉佑吏子(jyu+)さんほか、色んな分野の方とコラボレーションしてひとつのコンサートを作ろうという企画です。

音楽も作品を形成するひとつの装置になり得るんですね。

現代音楽ってわりと色んなものと融合しやすいので。今後こういう企画をたくさんやっていきたいなと思っています。今回企画を主導しているのはピアニストの白石麻奈美さんです。中央公会堂の特別室は天井画「天地開闢(てんちかいびやく)」などもある大正モダンなデザインなので、この空間に合わせたプログラムを作ろうと発案されました。演奏としてはバッハ、モーツァルト、ショパンの西洋の音楽と、山田耕作、貴志康一など日本に西洋音楽が入って来て間もない大正以降の音楽を演奏する。私も空間のための音楽を作曲します。ライブ配信でどこまで伝えられるかが今の課題。あまり繊細な音を使うわけにはいかないなと思っています。

ときに時間や空間を超越して様々なものと交じり合う。そんな表現も現代音楽では可能なんですね。

それがすごく面白くて楽しいです。この白石さんが主導する『リベラルアーツへの挑戦』のシリーズには毎回参加させて頂いています。わりと自由にやらせて頂ける場でもあり、ありがたいですね。先日の贈呈式で披露した曲「マーメイド」はこのリベラルアーツのために作った第1回目の曲です。シリーズ vol.1『ピアノのために』はヒビキミュージックサロン リーヴスという北浜にあるサロンのようなホールで開催しました。それが他分野の方とコラボレーションした始まりの企画です。vol.2の『コーヒーと音楽で過ごす、涼』では子供のためのピアノ曲を書きました。ただ曲を作るだけでは面白くないので、楽譜に絵を描いて紙芝居のようにして見せたのも楽しかった。

曲が進むごとに絵も進んで、視覚的に音楽が味わえるんですね。

母にも手伝ってもらいながらイラストも手書きしました。vol.3『温 ～言葉でぬくもる音楽、どうぞからだもほっこりと』では歌の曲を書いたのですが、これはちょっとコメディみたいな感じ。曲名は「ぼくのご主人はスマホ中毒」っていう(笑)。

タイトルもユニークです。こうした高木さんの音楽はどうしたら聴けますか？

私のユーチューブチャンネルに記録の意味も込めてアップしています。前回の vol.4『建築×音楽』は知り合いの建築家の方とのワークショップでした。まずは参加者の方と「理想の公園」を設計する。その後にそこで1日を過ごす時に「どういう音が聴こえてくるのか想像しよう」とすすめました。作曲する時も五線紙に書くのではなく、自由に自分たちのルールで楽譜を作るところから始めて。難しいとかではなく、「私たちはこういう風に楽譜を読んでいくから、このタイミングでこの音を鳴らそうね」というチームのなかでの共通理解を深め、楽譜の読み方を決めていく。最後にその曲をみんなで演奏する。楽譜が読めなくても、楽器が演奏できなくても、音楽が作れる。曲を作る過程をちょっと体験して欲しくてそういう形にしました。



楽譜が自分たちだけの“秘密の暗号”になるなんて。子どもも大人も好奇心を刺激されそうです。

楽器が弾ける人は弾いてもいいですし。参加者の中には、その日会場にあった石油ストーブに水をかけて「ジュ〜ッ」と蒸発する音を楽器に見立てて音楽を奏でる人もいました。

すごい！それが現代音楽なんですね。

だから、現代音楽ってなんでもありなんです(笑)。堅苦しいと思われがちなんですけど、本当にすごく幅が広い。ルールは自分たちで作って OK！ そういうのを体験してほしい。

そんな先生や授業が増えると、新たな現代音楽ファンが一気に増えそうです。

私もこういう活動が増えて欲しいなと思います。楽譜が書けなくても、演奏技術がなくても、音楽を自分たちで作って演奏して、みんなに聴いてもらって、ということと一緒に体験できると楽しいなと思います。

「何千年も前、音楽に感じていた神秘性。そんな時間を思い出せる曲を提供したい」

そういう意味で、高木さんが考える音楽とはどういうもの？

何なんでしょうね。音楽って、ただ楽器が演奏できる人のためにあるものではないということでしょうか。誰もが演奏を体験することで、今度聴く側になったときに、聴く態度もまた違ったものになってくる。そうやって音楽を身近に感じてもらえたらいいなと思っています。

確かに高木さんのワークショップを体験すれば、音楽に対する見方が変わりそうです。

私が作曲する音楽や曲のテーマとしては、神聖なものをイメージしています。今の時代は科学的なもので溢れていますが、例えば水や火に対して神秘性みたいなものを感じていた時代が、2000年前とかそれ以前の時代にはあったと思うんです。どこか信仰の対象でもあるような。私の音楽を聴いているときは、その感覚に戻ってほしい。

2019年「ジュネーブ国際音楽コンクール」で作曲部門1位を獲得した受賞作「L' instant(ランスタン)」は、画家・高島野十郎の油絵「蠟燭」に感銘を受けて作曲されました。

高島さんの絵に描かれた火は物質としての火ではなくて、神秘性を感じさせるものでした。今は日常に信号の音やテレビCMの音だったり、調弦された音で溢れている。でもただ「ド」と鳴らすだけでも、何千年も前の人たちにとっては人が振り返るぐらいの音に聞こえたんじゃないかな。だってその頃の人たちにとって楽器を演奏しない限り、素晴らしく調弦された音には絶対に触れられなかったはずなので。だから美しい音が聴こえてきたら、「今の音は何だったんだろう？」「神様の声なのかもしれない」と思うほどの神秘性を感じたと思うんです。今となってはそこまでは感じられない。それってある意味、豊かじゃない。その豊かさみたいなものを思い出せる時間というのが、私の音楽のなかで提供できればいいなと思いながら曲を書いています。



とても興味深いお話しです。そんな高木さんご自身が力を貰える場所があるそうですね。プライベートでは、宝塚歌劇団がお好きだとか。

宝塚すごく好きです。先日の望海風斗さんの退団公演『fffーフォルティッシッシー 歓喜に歌え！』も観に行きました。トップ娘役の真彩希帆さんとのコンビも最高に素晴らしかった。でも一番好きなのは、作・演出を手掛けられた演出家の上田久美子さんかもしれません。上田さんは宝塚の形式みたいなものを守りつつすごい崩してくる。ちゃんと手順は踏んでいるけど宝塚じゃないような仕上がりになる、というか（笑）。『fff』でもトップ娘役が「謎の女」という設定で、普通は男役に慕う従順なお姫様みたいな役が多いのに、そこを崩してくるのが本当に好きで。役者さんの持ち味をすごく活かせるような脚本を書かれる方だなと思います。

革新的な表現を受け入れる、宝塚歌劇団の懐の深さも感じます。

宝塚の伝統を守りながら作るのはすごく難しいと思うんですけど、そこを上手く利用して新しいものを作る。過去に印象的だった月組のショー作品『BADDY(バディ)ー悪党(ヤツ)は月からやって来るー』では、開演前のアナウンスを劇中でやっちゃう。しかも「とっくの昔に開演中だが」みたいな台詞で。「清く正しく美しく」すら逆にとる感じ。なのに作品としてはエンターテインメントとして成立させつつ、観終わった後に哲学的なものまで残るというのが滅茶苦茶すごいなと。本当に上田久美子さんの大ファンです。力を貰えるというか、上田久美子さんまでは行けないけど「私も頑張ろう！」と思える。私も聴いた人にそういう感動を残して、お家に帰ってもらえたら幸せだなと。上田さんの作品には何か問題意識のようなものがあって、そういう部分でも私の理想に近いのかなと思います。

作曲家として、今後やってみたいことはありますか。

やっぱり他分野の人とコラボレーションしてひとつの作品を作りたいです。その作品を通して観てもらった人が新たな発見を得たり、それにつながるきっかけが作れたらいいなと思います。

“何でもあり”な現代音楽の使い手としては、可能性は無限大ですね。

そうですね。やっぱりそれが一番の魅力、そこに気付いてもらえると嬉しいなと思います。ワークショップやコラボレーションなどの企画はひとりではできないことなので、周りの方に恵まれているのと、あとは運もあるのかなと思っています。

最後に恒例の質問です。高木さんが「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなところを教えてください。

私ゆるく「音鉄」なところがあって、一番好きなのが阪急電車で終電のときに流れる音楽なんです。エビスビールのCMソングとしても使われていた曲(『第三の男』)。家路を急ぐ人たちの中にはお酒を飲んでいる人も多く、へべれけになりながらも乗り過ごせないプレッシャーもあって。そこにあの音楽が「ちょっとみんな一旦落ち着こう」という雰囲気で流れてくる。あの光景が好きなんです。陽気さの中にある切なさというか、ちょっとマニアックかもしれないですけど(笑)。



【略歴】高木日向子(たかぎ・ひなこ)

1989 年生まれ、兵庫県出身。兵庫県立西宮高等学校音楽科ピアノ専攻、大阪音楽大学作曲学科作曲専攻卒業。給付奨学金を得て 2013 年、同大学院作曲研究室修了。2018 年から大阪音大助手を務める。2017 年日本音楽コンクール作曲部門第 3 位(室内楽作品)。2019 年ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門において、同率 1 位。受賞作品 “L’ instant ” は 2020 年同コンクールオーボエ部門の課題曲となる。現在は、作曲活動に加えて、子供から大人まで幅広い世代に現代音楽を聴く楽しみを伝える活動も行なっている。大阪音楽大学非常勤講師、大阪音楽大学付属音楽院ソルフェージュ講師。

【受賞歴・受賞候補】

2017 年第 86 回日本音楽コンクール作曲部門第 3 位、2019 年ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門 1 位、2020 年尼崎市文化未来奨励賞。

【公式 HP】

<https://hinako-takagi.studio.site/> Youtube: Takagi Hinako